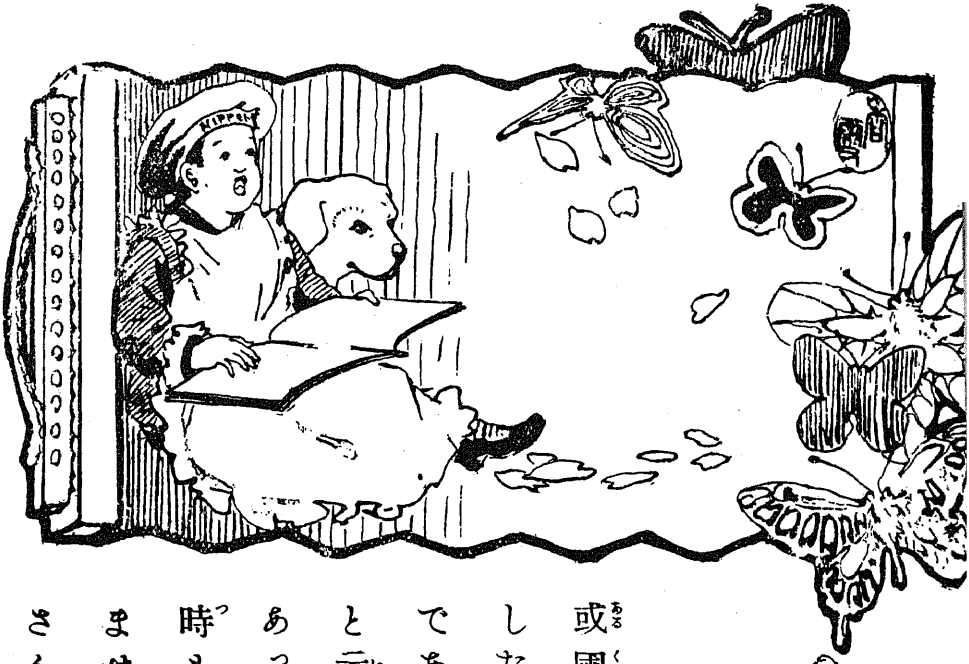

三人皇子

或國の王樣に三人の皇子がありました。兄さん二人は大層亂暴な方でありましたが一番小さい恭仁王と云ふ方は大層温和な悧好な方であったものですから兄さん達は何時も弟をのけ物にして一所に遊びませんでした。或日の事二人の兄さんは何處かへ遊びに行かれまし

たが夕方になってもあくる日になってもとう〳〵歸って來ません。そこで御父さんや御母さま初めみんなが心配して居ますので。兄さん思ひの恭仁王は

「私が探して參りませう」と云って旅の仕度もそこ〳〵はてしもなく出立され隣り國からだん〳〵と方々の國々を探し歩いた末遂々或町で二人の兄さんに出遇ひましたので大悦によろこび

「あゝもし〳〵兄さんぢやありませんか。母樣や父樣が大層心配して居らっしやいますから早く御うち〳〵行きませう。私は兄さん達を探しに來たんです」と云ひますと兄さん達は思ひ掛けない處で弟によばれたので一度はびっくりしましたが「別にうれしそうでもなく。なあに。構はないよ。家に歸るよりは遊んで居る方が面白いのだ

よ。お前探しになんぞ來ないでもいゝのに。早くお歸り」と云ひましたけれど恭仁王は兄さん達を連れて歸らなければなりませんからいつになく中々云ふ事をきゝません「夫れぢや。私も一所に遊びに行きませう」と云ひて後から付いて行きました。

さてそれから三人連でだん〳〵と森の中を通り大きな川を渡って行きますとそこに一つの蟻塚がありました。

「兄さん二人は之を見て

やー、いゝ物があった。破して中を見やうよと云って旁にあった石の片で叩き破らうとしますから恭仁王は急いで止めて

「兄さんお止なさいよ、そんなひどい事をするのはさ。」と云ふので兄さんも不省不生に止めて殘りおしそうに見返り〳〵。又少し行

くと或一つの大池の旁に出ました。處がそこには澤山の鴨が居て
いかにも面白さうに遊んで居ます。二人の兄さんは之を見て
「あゝ甘さうな鴨だな。捕へて食べ樣ぢやないか」と云って追っかけ
廻しましたが恭仁王が「可哀さうだから止しませう」と云ふので是も
とう〳〵お止めになりました。其れから又少し行くと今度は道旁
の木の枝に大きな熊ん蜂の巣があってたくさんの蜂がしきりに何
かして居ります。
兄さん達は之を見ると
「やー熊ん蜂。熊ん蜂！。熊ん蜂は殺したっていゝだらうねー恭ちゃ
ん。あの巣を叩き落して破して見やうよ。お前も手傳て御呉れな。」
と云ひましたが。

恭仁王は又云ふ事をきゝません。

「私は。蜂の巣など破すのはいやです。そんな事すると蜂に刺されますもの」と云ふので兄さんも少しこわくなり遂々之も止めになりました。

其内だん〳〵町近くに來ますと大層奇麗な宮殿がありました。處が不思議に此宮殿には誰も居ません。唯厩の中に石の馬が居る許りです。三人はドシ〳〵奥の方へ入って行くと一つの部屋の前に來ましたが。錠が掛て居ますので窓から中を覗くと古ぼけたテーブルの側に黑人が一人坐て居ますから二聲三聲呼んで見ましたが聞えないやうですから今度は戸を叩きました。すると頓がて立て來て戸を開けましたが。默て手招きしますから付いて行きますと

立派な食堂があってテーブルの上には出來たての甘さうな御馳走が澤山出て居ました。三人は大悦びで

「やゝ御馳走。甘いな。」とさわぎながら腹一杯つめ込みました。

頓がて夜になると黑ん坊がまた奇麗な寢室に連れて行って吳れました。次の朝起きて顏を洗ひ御飯を食べて居ると。また夕の黑ん坊が來て三人を石のテーブルの處へ連れて行きました。其石の上には三つの問題が書いてあります。

第一は此國の王樣が林の中に眞珠の玉を一千個撒いて置いてあるから夫れを一つ殘らず集めること若し一つでも不足したら其人を石にしてしまふこと。

第二は大池の底に落ちたお姫樣の部屋の鍵を探すこと。

第三は寢て居る三人のお姫樣の中。誰が寢る時に蜂蜜を食べたかを當てることであります。

一番年上の兄さんが先づ第一の眞珠の玉を集めに行きましたが中々集まりません。其中に夜になってしまひましたので遂々石になってしまひました。次ぎには二番目の兄さんが出掛ましたが之も中々殘らず集らない中に夜になったのでまた。石にされてしまいました。さて其次には第三の王子です。精出して集めに掛りましたが中々捗取らないのでがっかりして旁の石の上に腰を下して

「あーあ。僕もまた石にされてしまふのかなあ」と泣き出しさうになって居ますと。何處から出て來たか蟻塚の王が五千の家來蟻を引き連れて加勢に來て呉れたので忽ち殘らずの眞珠を集めてしまひま

した。

さて第二の問題池の底の鍵は何うして探らうかと考へながら池の岸迄來ますと丁度其所に此間助けて遣った鴨が居ましたから

「オイ鴨！お前池の底にあるお姫様の鍵を探って呉れないか」と云ひます。

「へー御易い御用です」と云ふかと思ふと直に池の底に潜ぐって鍵を探って呉れました。次には

第三の問題です姫の寢て居る所へ行って見ると誰れも〳〵も同じ樣でそして口のあたりも奇麗ですから誰が寢る時に蜂蜜を食べたのか頓とわかりません。恭仁王は

「是は困ったなあ。何うしたらわかるか知らん。と頻りに考へ込んで

居る所へ來たのは前に破されそこなった蜂の巣の女王です。
「若樣何をそんなに御考へですか。私に出來る事なら御話下さいませ。御恩返しに働きませう」と云ひました。恭仁王は悅んで
「おゝ蜂さん。困った事があるのだよ。此處に寐て居る三人の中で誰が蜂蜜を食べたんだらう。夫れを當てないと私も石にされてしまふんだからねーお前知て居るなら敎へて吳れないか」と賴みますと
「まあそんな事ですかそれは譯はありません。私が見て上げませう」
と云ひながらブーンと飛んで行って嗅ぎ回りましたが頓がてまた飛で來てあの一番年の若いお姫樣が蜜を食べました。と云って何處かへ飛で行ってしまいました。さて此三つの問題が解けましたので宮殿の魔法はすっかりとけて睡て居たものは起き、石になった兄さ

ん達や馬なども生き返り宮殿の中には大勢の人が入れる樣になりましたので此國の王樣は大層悅んで恭仁王を貰って此國の王樣にして御自分は田舍へ御隱居なさいました。めでたし〳〵

私はもみぢ

ゆき子

私は御庭のもみぢです。私の生れました時は恰も櫻の花のさかりでぽか〳〵とあたゝかなよい御天氣の日でしたから皆さんはわざ〳〵向島や小金井へ御花見に御出かけになりました御留守の時でした。それですから私が生れた斗りで眞赤な顏を天鵞絨の蒲團の中から出して躰はまだ扇の摺のやうになつてのびずに居りました頃の事は皆さんは御存じなかったでしやう。私は皆さんの聲をきゝましてはやくお友達になりたいわのさくらの花のやうになって皆さんと御話が出來るやうになりたいものだと思って居りましたの。

私の躰は奇態な躰、私ばかりでわりませんわの枝に居る澤山の兄弟も、この枝に遊んで居ますわの姉妹も皆同じ事ですが皆澤山の囊がいくつも〳〵ならんで重さなっ